

身体表現発表会における学生の協働的な学び

松井 いずみ

Collaborative learning of students in the Process of Preparing for a Bodily Expression Performance

Izumi MATSUI

これまでの研究で、本学の伝統行事「身体表現発表会」の準備段階における学生の意識の変化や、学びについて明らかにしてきた。本研究では、身体表現発表会終了後に提出された学生自身の言葉で語られているレポートについて、KH Coder を使用し、これまでの結果に基づき更に詳しく分析することを試みた。結果として、抽出された語のうち出現回数の多かったものは、「人」「意見」「自分」「大切」「言う」「クラス」であり、それらの語が学生のレポートの中でどのように用いられているのか探ることで、学生の協働的な学びの詳細が確認された。また、それらの語の関係性を共起ネットワークで確認することにより、学生の学びの全体像を視覚的に把握することができた。

キーワード：身体表現発表会、協働、学生の学び、テキストマイニング

1. はじめに

教育再生実行会議の第七次提言で「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について」が示されている。インターネットの出現は私たちの革命的な進歩をもたらし、更に急激に変化していくであろう未踏の時代において、今後は、「人間が優位性を持つ資質・能力を磨き、高めることがますます必要」になる。第七次提言では「人に対して働きかけたり、人の感性に訴えたりする仕事や活動を行なうことはもとより、職場やコミュニティの中で、他者と目標を共有し、協働して課題解決に取り組むことは、いつの時代にあっても不可欠」であるとし、これからの時代に極めて重要な資質・能力の中に〈感性、思いやり、コミュニケーション能力、多様性を受容する力〉があげられている。¹⁾

これまでの研究で、「身体表現発表会」における学生の学びを調査・分析したところ、学生

自身が学んだと感じている項目の1位は「意見を言うことや伝え方」(80%)で、「(舞台)表現方法」(77%)を上回った。そして、「協調性」(75%)「積極性」(70%)「周りの人への感謝」(70%)や「一人ひとりの大切さ」(60%)を感じることができたという結果からは、コミュニケーション能力をはじめとする人との関わりや社会的な学びなど、多くの学びを得ていることがわかった。²⁾ 子どもたちに伝わる表現方法を探り、学生同士がお互いの表現を観察し合い、何度も話し合いを重ねながら協働して作り上げていく過程では、自分の考えを相手に伝えるための言葉選びや、それを伝える方法を学び、同時に聞く姿勢も作られていく。

「協働」とは、「同じ目的のために、対等の立場で協力して共に働くこと」³⁾である。坂本(2008)は、協働学習について、「他の組織や地域、異なる文化に属していたり、多様で異質な能力を持った他者との出会いが前提」「学習者

の高い自立性と対等なパートナーシップ、相互の信頼関係の構築」「学習目標や課題、価値観および成果の共有」であるとしており、「それは他者同士の出会いから生まれる矛盾や葛藤を止揚し、新たな共同体と価値観を創造することにつながる。」と述べている。⁴⁾

身体表現発表会では、衣装係、大道具係、プログラム係、音響係など、学生全員がそれぞれ仕事を担当することにしており、これもまた協働的な学びであると言えるだろう。単なる知識の活用だけでなく、役割分担や、責任感、信頼性をはじめとした、コミュニケーション力が不可欠である。

身体表現発表会における学生の学びについて、筆者のこれまでの研究では、本番に向けて準備する各過程での学生のモチベーションを数値化させたものや、予め準備された単語の中から選択する方法のアンケートを集計したデータを使用してきた。そこで、本研究では、それらの結果に基づいて、学生自身の言葉で語られた自由記述のレポートを使用し、その質的データに対しテキストマイニング方法を用いて、更に詳しく分析していきたい。自由記述の文章を分析するという営みには、客観性ないし信頼性の維持という問題生じるため、KH Coderを用いることによって「分析者のもつ理論や問題意識によるバイアスをより明確に排除」⁵⁾し、言語的分析を行う。また、樋口(2014)は、「リストアップされた特徴的な語を確認していく際には、それらの語が、元データ中でいかに用いられていたのかを把握することがきわめて重要である。ある語が特徴的だということがわかっても、その後がデータ中でどのように用いられていたのかははっきりわかっていなければ、データの特徴をつかんだことにはならない」⁶⁾と述べている。そこで、本研究においても抽出された語を元に、学生のレポートの中でどのように書かれているのか探っていく。

II. 研究の目的と方法

1. 目的

身体表現発表会における学生の学びについて、学生自身の言葉で語られたレポートを、テキストマイニングを用いて計量的に分析し、これまでの研究を更に明確なものにしていく。

2. 方法

身体表現発表会終了1か月後に提出されたレポートの内容をデータとして打ち込み、KH Coder (ver.2.00) を使用して分析していく。

(1) 対象

身体表現発表会終了1ヶ月後に当該学生から提出された「身体表現発表会において学んだこと」に関するレポート。

提出時期：2017年1月

有効レポート数：103件

(2) テキストデータの前処理

表記の統一：「子供」「こども」→「子ども」/
「ひとりひとり」「一人一人」→「一人ひとり」/
個人名→「リーダー」「サブリーダー」等の役名、又は文脈によって「友だち」/「皆」→「みんな」等

強制抽出する語の指定：「身体表現発表会」「雰囲気」「身振り手振り」等

使用しない後の指定：「思う」「思った」「思いました」等

(3) 調査方法

① 頻出語と出現回数

学生のレポートの中で多く出現している言葉にどんなものがあつたか、出現回数の多い順に確認する。その際「雰」「身」等、前後の語と切り離されて出現したものについては、前後の語を確認後、「雰囲気」「身体表現」等の強制抽出する語として指定する。出現の多かった語、また、特徴的な語について、KWIC コンコーダンスを用いて文脈を探る。

② 共起ネットワーク

抽出された語の中で、関連が特に強い語同士を表す共起ネットワークを作成する。描画数

120、最小出現数 25 に設定、強い共起関係ほど太い線で描画、出現数の多い語ほど大きい円で描画されているため、データの全体像を視覚的に把握することができる。また、共起関係の強いとされる語に関して、実例として学生の記述の中でどのように表されているのか探っていく。

(4) 論理的配慮

対象となる学生たちには、本研究の趣旨、個人は特定されないこと、学術研究目的以外に使用しないことを説明した上で承諾を得た。

3. 先行研究

学生らの協働的な制作活動における学びに関する近年の研究として、教員志望の学生による絵本の共同制作について分析した清水(2017)の研究⁷⁾、保育を学ぶ学生らの音楽劇制作における表現力と人間関係力の向上に関する津山ほか(2017)の研究⁸⁾、秋政ほか(2008)による医療保育科の学生らのオペレッタ制作における学習成果の考察⁹⁾、絵本の共同制作における看護・医療系学生のチームコミュニケーション向上やアート教育に関する大溝(2013)の研究¹⁰⁾等が挙げられる。

どの研究においても、学生らの表現力やコミュニケーション能力の向上について述べられているが、本研究ではテキストマイニングを用いることによって、学生の言葉を拾いながら細かく分析していく。

Ⅲ. 結果と考察

① 頻出語と出現回数

前処理後、総抽出語数は 29,161 語、出現回数の多かったものは、「人」196 語、「意見」189 語、「自分」180 語、「大切」163 語、「言う」143 語、「クラス」140 語であった。(表 1「頻出語と出現回数」)

このうち、「人」については、「人と関わることの大切さを感じられました。」という内容の記述が多く、他に「互いに意見を伝える情報を

共有する際には友だちというよりも、1 人の社会人、人として付き合うことが大切だと思います。」といった、これまでと違う関わり方を学んだという記述や、「照明や会場を運営してくださる方々など見えないところでも沢山の人が関わっていて、色々な人に支えられたからこそできた。」という感謝の気持ちを持ったことなど広く使われていた。学生たちが、この発表会で、多くの「人」との多くの関わりを感じられたことがわかる。また、「一人でもコミュニケーションがとれていない人がいる係は、進行状況もバラバラで、仕事も把握していない様子だった。」「自分は大丈夫だと思っていた言葉も、人それぞれ感じ取り方は違ってくるということを知り、他を思いやりながら考えて伝えていくことを学んだ。」など、多様で異質な能力を持った他者との、失敗や反省から得た学びについても記載されていた。

同じように、「人」から学んだものとして、「リーダー」や「友だち」という語があげられている。衣装係、大道具係等の役割のひとつとして、クラスをまとめる「リーダー」がいる。リーダーは、クラス全員からの推薦で、信頼されている学生が選出されるため、そのリーダーの立ち振る舞い、言葉かけ、クラス運営方法、そして人間性等を学んだという記述が大変多かった。例として、「責任感の強さから辛い思いをしながらも必死にみんなを引っ張って行ってくれたリーダーの存在があったから成功できたのだと思います。宝物です。」「リーダー自身が全力で、その姿をみんなが見て知っていたから、リーダーがきついことを言っても誰も文句を言わず素直に聞き入れ、最後までついて行っと思う。」といった記述が挙げられる。更に、「リーダーは、みんなの知らないところで一人ひとりのことをしっかり見て寄り添っていた。私も保育者になった時はこのように子どもたちを一人ひとり見てあげたいと思った。」と、リーダーを通して、将来の保育者像を描く学生もいた。また、「人に頼る。相談する。リーダーにもつ

と寄り添ってサブリーダーだけではなくてクラスみんなで支えられたらよかったと思いました。」といったように、人に頼ることや、支え合うことを学んだという学生も少なくなかった。全てを一人で抱え込んでしまうのではなく、人を頼ることができるということは、人を信頼することができることにつながる。そして、リー

ダーをもっと支えることができたはずだという捉え方は、協働的な学びであると言えるだろう。

この発表会はクラス単位での舞台であるため、「クラスみんなでやることには協調性が必要である。」「クラスの人の意外な一面がわかり、今まであまり関わる機会がなかった人と仲良くなれ、クラスの絆が深まったと思います。」「他のクラスの発表を見て、クラスの個性が出ていると感じました。」など、クラスというひとつの共同体を通して学んだという記述は必然的に多くなった。協働の定義でもある「対等の立場で協力して共に働くこと」は、クラスメートという対等の関係のもと成り立ち、特有の学びを得ることができる。

特徴的な語としては「話し合い」や「話し合う」が挙げられる。レポートの中では、「話し合いをすることで、自分自身が見えていなかったこと、気づかなかったことが鮮明にわかりました。」「本番直前の話し合いでみんなの本音を聞くことができ、発表会を成功させたいという気持ちが高まった。」「みんなから意見をもらえ、話のずれがなくなり、練習だけでなく、話し合いも重要だと学びました。」「本番が近づくにつれ、自然に演技について話し合っていることが日に日に多くなっていったと思います。」など、話し合うことによって、理解し合うことができたと言われている。しかし、その話し合いの機会がうまく持てず、「問題に対してみんなは、表では打ち明けずに、小さなグループ内だけで話す状態になっていた。この問題について全体で話し合わないのか」と疑問に思っていたが、私自身も打ち明けられずにいた。発表会直前に、クラスで集まり、一人ひとりの今の気持ちや反省を伝える機会があった。その時、泣きながらこの問題を話す子がいた。それを聞いて、胸が痛くなった。また、もっと自分も頑張ればよかったと反省した。こういった機会がもっと前から与えられていれば、もう少し早く改善できたのではないかと思う。」と振り返る学生も見受けられた。こういった意見こそ、今後の指導に生

表 1 「頻出語と出現回数」

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
人	196	感じ	35	感謝	22
意見	189	出る	35	気	21
自分	180	出来る	35	作り上げる	21
大切	163	たくさん	34	身体表現発表会	21
言う	143	楽しい	34		
クラス	140	大道具	33	仲間	21
学ぶ	129	役	33	サブリーダー	20
練習	124	頑張る	32		
気持ち	107	衣装	31	時間	20
見る	106	劇	31	先生	20
考える	99	知る	31	伝わる	20
伝える	86	話し合う	31	アドバイス	19
思い	81	言葉	30	完成	18
感じる	66	参加	30	見える	18
子ども	66	持つ	30	行う	18
全員	63	知る	30	分かる	18
作る	61	動き	30	ダンス	17
一人	51	周り	29	意識	17
リーダー	49	全体	29	違う	17
相手	49	雰囲気	29	一番	17
良い	48	本番	29	強い	17
発表	47	セリフ	27	言い合う	17
聞く	47	決める	27	作品	17
話し合い	47	子	27	大変	17
表現	46	話す	27	やる気	16
声	44	考え	26	改めて	16
舞台	43	友だち	26	機会	16
一人ひとり	42	お互い	25	言える	16
必要	42	係	25	成功	16
話	41	気づく	23	責任	16
演技	38	仕事	23	先輩	16
大きい	37	難しい	23	動く	16
保育	37	演じる	22	一緒	15

かしていかなければならないと考える。

また、「先輩」という語も 16 語抽出された。学生たちは入学前の事前学習として身体表現発表会に招待され、先輩の舞台を見ているため、この発表会の準備はそこからスタートしていると言っても過言ではない。その経験が、「先輩たちの発表会をみたときは、大学に入ってわずか数か月でこれほどの作品を作ることができるようになることに驚いた記憶がある。」「先輩の発表会を見ていたので、楽しみにしていました。」という記述になって表れていた。更に本番 10 日前にも前年度の舞台の動画を観せており、その際には「先輩の発表会を見てレベルが全然違って焦ったし、リハの段階ではほかのクラスを見て改善点がたくさん見つかったのではほかの人のものを見るということはとても良いことだと思った。」「先輩達の映像を見た時、細かい部分まで手を抜かずに 1 人ひとりが何度も練習を重ねて作り上げたものだということがとてもよく伝わり、私達はこのままの練習でいいのだろうかという焦りを強く感じました。」と記載されているように、仲間だけでなく、先輩の舞台からも多くを学んでいることがわかった。

② 共起ネットワーク

出現回数も多く、強く共起していると示された語は、やはり、「人」「意見」「自分」「大切」「言う」「クラス」などであった。(図 1「身体表現発表会における学生の学びの共起ネットワーク」)

中でも「意見」は、「自分」「言う」「大切」「全員」「聞く」など、多くの語と共起しており、「相談するときに、人の意見に賛同するだけでなく、自分の意見を言うことが大切であるということ」を学んだ。」と述べる学生が大変多かった。前回の研究で、学生自身が学んだと感じている項目の 1 位は「意見を言うことや伝え方」であったが、今回の分析結果からも、学生らは意見を言うことを学んだと感じていることが明確になった。「意見」と「聞く」が共起している文章は、「普段自分の気持ちを伝えるのが得意な

人の気持ちは何となくわかっていたが、あまり自分の気持ちを出すのが苦手な人の意見を聞くことができて、新しい発見や、その人らしい視点を知ることができ、そこからどんどん良い作品になっていったように思います。」という形で書かれていた。普段自己主張しない友人の意見を「聞く」ことができ、有意義であったという主旨である。この結果から、学生らはこれまで、自分から意見を述べ、考えを発信する経験が少なかったのではないかと推測できる。情報溢れるこの社会において、情報を受け取ることは慣れているはずだが、これまでの学校生活、また SNS 等において、同意・賛同する機会は多くとも、自分の意見を伝えるために言葉を選ぶ経験は少なかったのではないだろうか。「私は、集団の中で意見を言うのはあまり得意ではないが、何回も経験していくうちにどう思われるかなどを考えなくなっていった。」という内容からは、一部の学生は、これまで、なるべく自己主張せず人との関係性を維持してきたということが伺える。他に、「意見」が「全員」と共起している例としては、「意見を出し合うことや思っていることを面と向かって言うことはとても難しいことです。だが、全員が意見を言い合うことができ、協調性や想像力、創造力が身に付いたと思いました。」という記述が見られ、協働学習における創造的な効果が得られたことがわかる。

次に、「子ども」と共起していた「考える」「表現」「舞台」について、どのように用いられていたか調べたところ、「自分たちがうまくできることも大切であるが、一番は見ている子どもたちのことを考えて劇を作っていくことが重要であると学んだ。」「子ども達に伝わる表現方法を、演技する際に録画したり、友だちから意見をもらったりして、苦労しつつ表現の仕方を学んだ。」「舞台上から観た子どもたちの顔はとても楽しそうで身体表現発表会を成功させることができたと感じた。」と記載されており、この発表会の準備から本番まで一貫して「子ども」

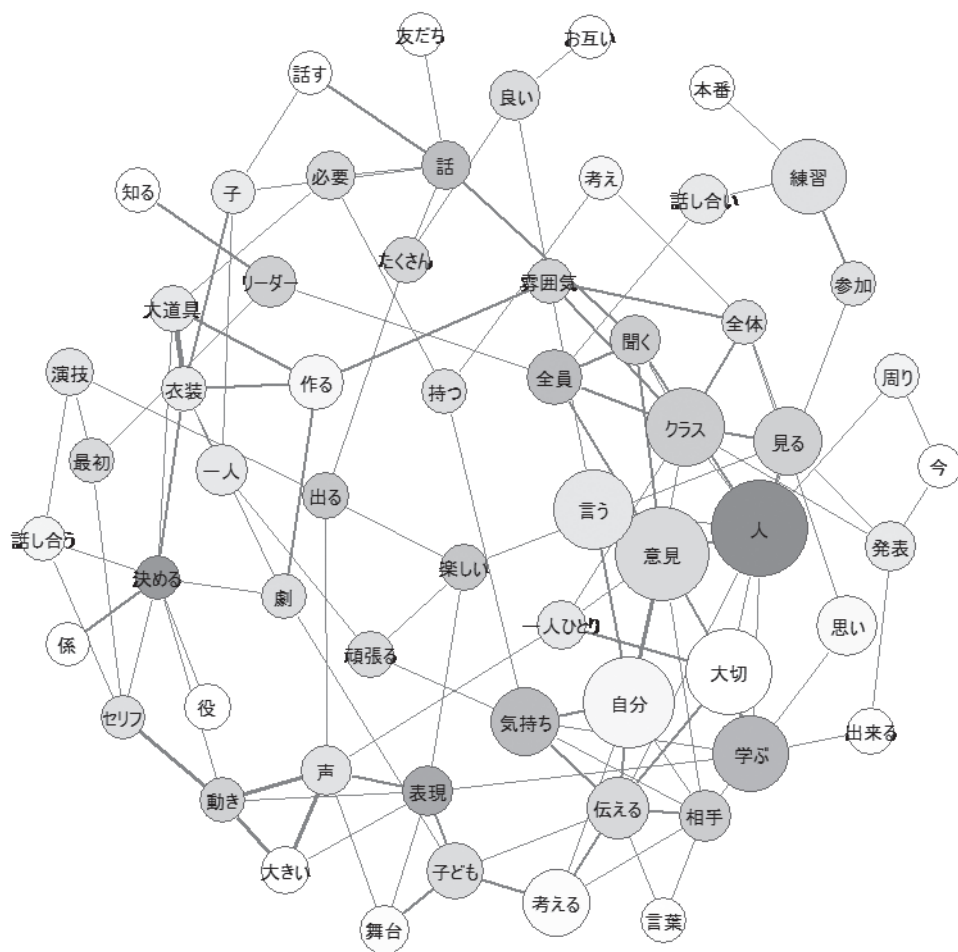


図1「身体表現発表会における学生の学びの共起ネットワーク」

に対する思いが念頭にあったことが伝わってきた。この制作活動の〈テーマ決定〉〈あらすじ作り〉〈セリフ作り〉〈舞台設定〉〈音楽選択〉〈表現方法〉等、全てにおいて対象は子どもたちであり、制作の過程においては、これまで保育科の各授業で得た知識を生かしつつ、更に想像力を使いながら子どもについて思慮していく必要がある。「子どもの立場になって、物事を見て考えることを学ぶことができました。ちょっとした言葉遣いや動作も子どもにとってどう感じるか考えたり、実際に客席に座って子どもの目線から改善点を探したり、どうしたら子どもがもっと楽しんでくれるかなど、意見を出し合い

ながら考えることができ、自分の学びにすることができました。実際にやってみることで、より積極的に子どもの気持ちを知ることができたと思います。」という記述からは、考えながら実践をくり返すことで、より主体的に子どもに関する学びを得たことがわかる。

また、「一人ひとり」という語が多く出現したことも特徴的であり、次のように、「大切」という語と強く共起していた。「クラス内でのコミュニケーションや一人ひとりの意識が大切だと分かった。」「一人ひとりの大切さである。一人ひとりが大切なのだ。全員がいてこそ、成り立つのだ。いなくなったらどれほど困るか

いうことを理解し、思いやり進めていくことは、とても大切である。」入学半年後から発表会の準備が始まるため、クラスの中にまだ話したことのない人も存在するようだが、クラスの仲間一人ひとりを大切に思えるようになるこの事象は、理屈や指導で教員が教えられることではなく、学生たちの主体的で協働的な学びの中にこそ生まれるものであると言えるだろう。

IV. まとめ

本研究では、身体表現発表会における学びについて、学生自身の言葉で語られたレポートを、テキストマイニングを用いて計量的に分析することで、より深く調査することができた。

特徴的なのは「意見を言うこと」が、やはり身体表現発表会において学生たちが学んだと感じていることの第1位であり、コミュニケーションをとりながら協働していく上で「意見を言うこと」が大切だと感じていることがより明確になったことである。

今回のような活動において、「意見」は、次の4つの側面を持つと言える。

- ・ アイディア的な側面
- ・ 同意・称賛的な側面
- ・ 自己主張の側面
- ・ 批判的な側面

アイディア的な側面を持つ意見は、クラス全員が発言することで更に創造性を持ち、同意・称賛的な側面を持つ意見は、学生一人ひとりの存在を認め、更に全体を向上させることができる。自己主張の側面を持つ意見は新しいコミュニティを生み、そして批判的な側面を持つ意見は、述べる側の思いやりを育て、聞く側の多様性を受容する力を育てる。これらは全て、協働的な学びであると言えるだろう。

また、保育科特有の「子ども」という語と、「考える」「表現」「舞台」が共起している文章を調べたところ、多くの学生が「子ども」のことを真摯に考え、学んでいることがわかった。各授業にてこれまで学んだことを生かして、子ども

の気持ちに寄り添い、実践的、主体的に得たものは、大きな学びとなる。

身体表現発表会において「学んだこと」に関する学生のレポートには、良いことばかりが書いてあるのではなく、反省や失敗から学んだという記述も散見された。このような内容は大変貴重で、今後の指導に生かしていくべきであると考ええる。

教育再生実行会議の第七次提言で、これからの時代に求められる極めて重要な資質・能力のひとつとして示された〈感性、思いやり、コミュニケーション能力、多様性を受容する力〉の全てが、身体表現発表会に向けた協働的な活動に必要なものであり、学生たちの学びにつながっていることがわかった。

本学の「身体表現発表会」は、第51回目を迎える保育科の伝統行事である。筆者が担当する以前の先生方によって肅々と引き継がれてきたこの行事に、今後も敬意を持って関わっていきたいと考える。

参考文献

- (1) 教育再生実行会議(2015)「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育、教師の在り方について」(第七次提言)
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/pdf/dai7_1.pdf (2017年10月1日取得)
- (2) 松井いずみ(2017)「身体表現発表会における学生の意識の変動と学び」『駒沢女子短期大学研究紀要』第50巻、駒沢女子短期大学 63-71
- (3) 『大辞泉 第二版』小学館 952
- (4) 坂本旬(2008)『「協働学習」とは何か』『生涯学習とキャリアデザイン』(5)法政大学キャリアデザイン学会 49-57
- (5) 樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版 28
- (6) 同上、42
- (7) 清水由朗(2017)「絵本の共同制作における

- 協働の生成・発達過程の研究 ～美術を専門としない学生による非言語的で促進的な相互交渉のプロセス～』『教育学論集』第68号、創価大学教育学部・教職大学院 137-151
- (8) 津山美紀・矢野洋子・富永剛・田中敏明(2017)「保育を学ぶ学生の表現力と人間関係力の向上を目指した音楽劇 ―関係5分野の連携による共同制作―」『九州女子大学紀要』第53巻(2)九州女子大学 75-84
- (9) 秋政邦江・尾崎公彦・青井則子・伊藤智里(2008)「医療保育科におけるオペレッタ授業の実践報告」『川崎医療短期大学紀要』28号、川崎医療短期大学 59-63
- (10) 大溝文清(2013)「看護・医療系学生の共同制作における、チームコミュニケーション向上のためのアート教育」『弘前医療福祉大学短期大学部紀要』1巻(1)弘前医療福祉大学短期大学部内紀要編集委員会 45-52